

音楽にかける、

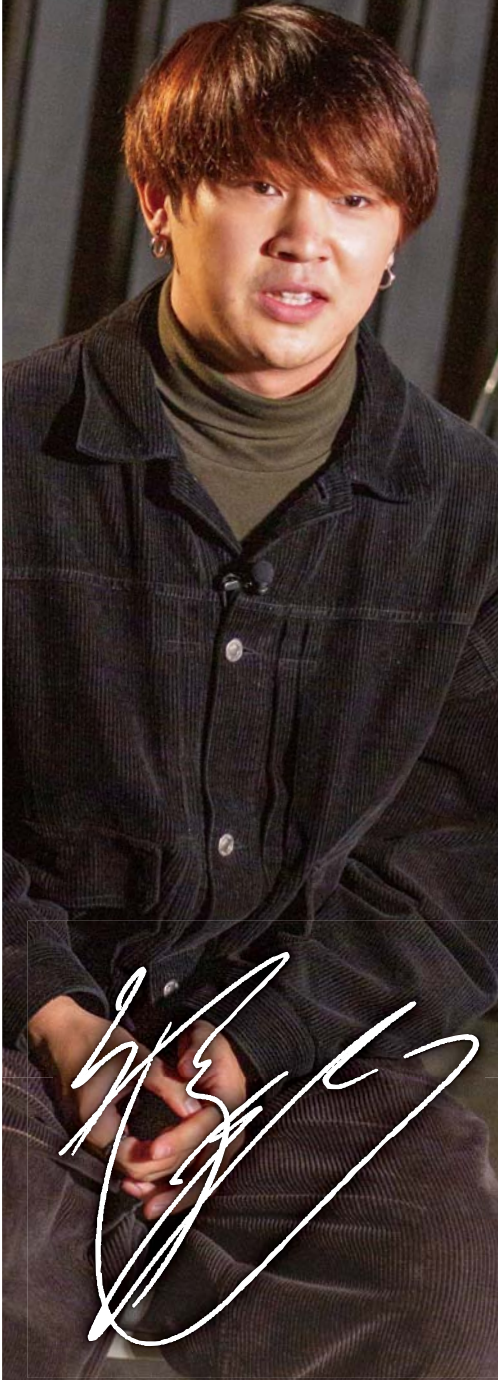
二十歳の群像。

ベース
RIKUTO SAITO

齊藤 陸斗

ボーカル & ギター
YUDUKI HATAYAMA

畑山 悠月



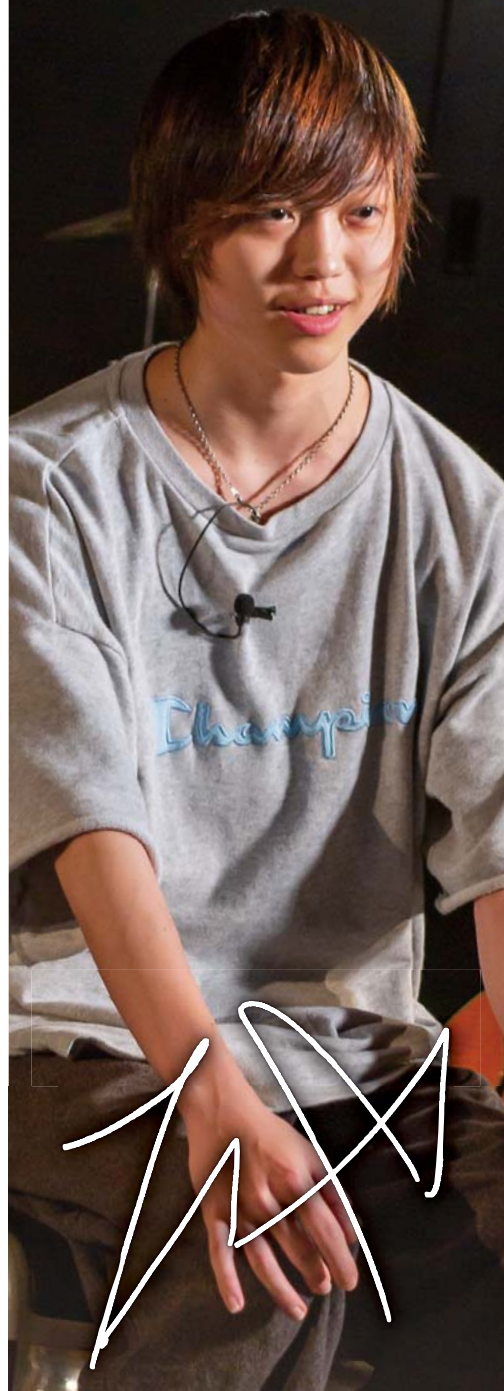
- 1 茨戸ガーデン・ノースヒル、番屋の湯(小さい頃によく行った)、りんくる、スポーツ広場
- 2 はまなすの丘公園
- 3 佐藤水産のおにぎり
- 4 まるごとフェスタ、さけまつり
- 5 コストコ
- 6 バスが少ない
- 7 自然がたくさん。ライジングサンがある
- 8 Nature
- 9 野外ライブをする
- 10 地下鉄、バスの本数

- 1 夕日の美術館あたり、あいぼーと、図書館、石狩翔陽高校の裏の川
- 2 はまなすの丘公園(行ってみたい!)
- 3 サケ
- 4 駅伝、まるごとフェスタ、りんくるの祭り、花畔神社の祭り、緑苑台の祭り
- 6 バスに乗り遅れたら次のバスまで1時間
- 7 皆さん温かく、平和な心をもっていること
- 8 Peace Town!
- 9 自分たち主催の野外フェスをやりたい!
- 10 地下鉄、JR、バスの増便

KALMAの3人に聞きました!!

- 1 石狩でお気に入りの場所
- 2 石狩で彼女とドライブに行くなら?
- 3 石狩の食べ物と言えど?
- 4 子どもの頃、楽しみだった石狩の行事
- 5 石狩で気になること、物、人
- 6 石狩で地味に苦労したこと
- 7 「石狩市民で良かった!」と思うとき
- 8 英語で石狩を表現すると?
- 9 石狩で実現したい夢
- 10 未来の石狩に必要なもの
- 11 メンバー2人から感じる「石狩市民らしさ」

金田 竜也



- 1 りくとの家
- 3 茨戸ガーデン・ノースヒル
- 5 ゆづき、りくと
- 8 Stone hunt
- 11 最終バスがすぐ早い

石狩の皆さん全員が知っているバンドになりたい

音楽の世界でメジャーデビューを果たすことは、今も昔も変わらず大きな夢の一つでしょう。その夢を19歳の春にかなえたKALIMA。けれども、始まりは平たんなものではありませんでした。

ミニアルバム「T.E.B.N. T.E.B.N.」を引っ提げ、初の全国ワンマンツアーを企画していた矢先、コロナ禍が彼らの前に立ち上がったのです。晴れてデビューの年、最も忙しくなるはずだった彼らを受け取っていたのはステイホームの日々。歯がゆい思いをしないわけがありません。

それでも「自粛期間はひたすら曲づくり。たくさんできましたよ」と軽やかに笑うのはボーカル&ギターの畑山さん。このときの成果が、昨年11月発売

の「LaLaLa E.P.」にも反映されていると言います。

あくまで穏やかに現実と向き合う彼らに今の夢を尋ねると、金田さんがぼつりと一言、「ホールツアーをやりたいですね」。この言葉に驚いた2人のメンバー。「だってそんな夢、今、初めて聞きましたから！」

キャッチーなメロディーと聴く人の心を揺さぶる情熱的な歌詞が魅力のKALIMA。「いつか僕たちらしい元気な音楽を、花川北コミセンや地元のエベントで披露できたら」と畑山さんが夢を語れば、斉藤さんも「石狩の皆さん全員に僕たちのことを知ってもらえるぐらいのバンドになります！」と負けていません。

彼らにとって、石狩は特別な場所。ここで育った畑山さんと斉藤さんほもちろん、札幌出身の金田さんにとっても「大きなライブの前には石狩に来て、陸斗(斉藤さん)のおばあちゃんの家泊まった」という第二の故郷です。

「KALIMAの原点は石狩。例えば『素晴らしい毎日』という曲の舞台もここです」と畑山さん。歌詞の中に出てくる言葉——草の匂い、バス停、海——からも地元への思いが伝わります。大好きな石狩から全国へ！その活躍に心からエールを送ります。

昨年10/9に石狩翔陽高校で行われたミニ翔陽祭でのライブ



畑山さん・斉藤さんの母校で行われたライブは、始まる前から長蛇の列ができました!



全国流通盤となった「DAYS E.P.」のジャケットは石狩の「バイキング公園」。曲の中にも「虹色の公園」として登場する、いまやファンの聖地。ミュージックビデオなども石狩のロケーションにこだわり、制作をしています